

長野県立歴史館たより

2024年 夏号 vol.119

特集

仲義曾木 濤怒風疾



疾風怒濤 木曾義仲 ~文書と絵画で見る義仲の一生~

はじめに

県歌「信濃の国」で「旭将軍」義仲として知られる木曾義仲。東国の信濃で挙兵し、当時都で栄華を誇っていた平家を京都から追い出しました。その義仲が琵琶湖ほとりで戦死してから840年。当



木曾義仲木像（義仲寺蔵）

館で初めて、木曾義仲をメインに据えた企画展を開催します。企画展の内容を以下ご紹介します。

義仲と京武者のネットワーク

義仲の父義賢は、源氏の棟梁為義の次男です。父為義とともに朝廷に出仕しており、なるひと 睦仁親王（のちの近衛天皇）のたてわきせんじょう 帯刀先生（皇太子付き武官長）となりました。義賢は軍事貴族として朝廷武官のトップとなったのです。また当時の摂関家内の有力者藤原頼長は、為義・義賢を侍として近侍させたほか、うのありはる 宇野有治（近衛天皇皇后まさるこ 多子の皇后侍長）、けびいし 宇野親治、源頼政（けびいし 検非違使）なども結集させました。

当時の朝廷では、上皇と同様に天皇の母や皇后、皇女などの女性が女院として政庁を開き、それぞれ武者を役人に集めて影響力を持ちました。例えば鳥羽天皇の娘八条院（近衛天皇姉）の蔵人に義仲の兄仲家、九条院（近衛天皇皇后）の判官代に仲家の子仲光が任官しました。義仲はこうした軍事貴族のネットワークのなかに位置づけられます。

地方を拠点とする武士にとって、都で活躍する軍事貴族は「貴種」であり、彼らは預望を集めた

軍事貴族を地方で受け入れていきました。為義の子義朝は南関東の三浦氏、次弟義賢は秩父氏のもとへ下向しました。しかし義賢は関東の勢力抗争のなかで甥義平によって殺害され（大蔵合戦）、ついで保元の乱（1156年）で為義らは敗れます。

義仲の信濃下向

義賢のもとにいた駒王丸（義仲）はこのとき2歳（もしくは3歳）でした。義賢に旧恩のあった武蔵国長井荘の住人斎藤別当実盛の手引きにより、信濃国権頭中原兼遠のもとに逃されました。当時信濃国府は筑摩郡にありました。国府から近い木曾周辺に拠点があったと考えられます。

駒王丸は元服を石清水八幡宮でおこない、義仲と名を改めました。先祖である源義家がここで元服したことを由来としています。木曾は京都の東国と西国の境界であり、信濃から見ると京都からの情報が最も早く届く西国の入口でもある、地政学的にもたいへん重要な場所でした。また、『平家物語』によれば中原兼遠は平家政権とつながっており、京都の官人だった可能性があります。

義仲の挙兵

治承4（1180）年、後白河法皇の皇子で八条院ゆうしの猶子となっていた以仁王が、平家追討の令旨を全国の源氏に向けて出しました。これを受けた義仲は挙兵します。義仲は木曾から直接上洛せず、府中から北上し、善光寺平へ入ります。当時、会津から越後の阿賀野川流域、さらに信濃川流域まで越後平氏城氏が影響力を持っていました。城氏の先祖には鬼女紅葉伝説で有名な平維茂がいますと考えられます。また伊勢平氏が10世紀頃千曲川流域を開発していたことから、善光寺平は平家

の影響力が色濃い地域だったのです。義仲は北信濃から北陸の平家を打倒し京都へ入ることにしたのです。

義仲の名を高からしめた戦いが更級郡横田河原（長野市篠ノ井）の戦



横田河原合戦の場面（当館蔵）

いです。この戦いでは義仲軍の構成がよく分かります。木曾党のメンバーは中原氏のほか東十郎進士禅師、検非違所八郎など、京の官僚を出自とするものが中心であることがわかります。義仲軍の主体は根井一族や海野氏、望月氏など東山道上に拠点を置いた武士です。

横田河原で平家の大軍を破ると、関東にいた源頼朝との不和が生じますが、嫡男義高を人質とさせ対立を回避、一路北陸道へ入ります。



長谷川信秋筆「木曾義仲合戦図屏風」(部分 当館蔵)

◎ 斎藤実盛との再会

ようきょく さねもり
謡曲の演目の一つ「実盛」。義仲の恩人である斎藤実盛を主題としたものです。実盛は平家方として篠原の合戦（石川県加賀市）で義仲軍と対峙します。すでに老齢であった実盛は白髪を染め名を秘して出陣しますが、義仲の臣手塚別当光盛にてづかべつとうみつもりより討ち取られました。そのことを樋口兼光よりひぐちかねみつ聞いた義仲はその頸を池で洗うと、黒髪が白髪に戻った、と『平家物語』で記されています。義仲



木曾義仲奉納 斎藤実盛着用兜（復元模造 多太神社蔵）

は悲嘆に暮れますが、その恩顧を偲び、実盛の兜などを多太神社に奉納し現在に伝わります。

◎ 入京後の義仲

私たちのイメージする義仲像は、『平家物語』などの軍記物語、第三者である当時の貴族らが記した二次史料としての日記の記事に依っています。義仲といえば「田舎者」「乱暴者」という先入観が強くなってしまいます。これは、義仲自身の出した文書がほとんどなく、とくに入京後の政策などが必ずしも明瞭でなかった部分もあります。近年、義仲の政治的動向がうかがえる古文書が長村祥知氏により紹介されました。これによれば戦時下、東大寺から兵糧米を徴収することを停止させる後白河法皇の院宣を義仲が奉じています。一時的であるにせよ、義仲が王朝体制のなかで政治的働きをおこなっていたのがわかります。



寺外初公開「木曾義仲書状」（国宝 東大寺文書）

今回の企画展では、この他、きそがんしよ「木曾願書」（当館蔵 江戸時代初期 こうわかまい幸若舞を題材にした珍しい絵巻）や木曾義仲合戦図屏風（当館蔵2点・国立歴史民俗博物館・最上義光歴史館各所蔵）などを展示します。ぜひご堪能下さい。（村石正行）

令和6年度 常設展示の紹介

原始

中央高地の縄文文化 ～定住のはじまり～

人類社会は、土器の発明によって「煮る」調理法を獲得し、食料摂取の幅が大きく広がりました。やがて植物栽培や動物飼育も始まり、食料生産の時代へと歩んでいきました。

今から1万年程前の縄文時代早期になると、一定の場所に長く居住する生活スタイルが浸透し、地域色豊かな土器が作られるようになりました。関東地方を中心に撚糸文土器が、中部地方には押型文土器が広く分布するようになります。

小テーマ「定住のはじまり」では、諏訪地域を代表する岡谷市膳棚B遺跡出土品を展示しています。

縄文時代の早期終末、絡条体圧痕文土器と呼ばれる特徴的な土器が作られました。芋虫の貼り付いたような特殊な圧痕が土器の表面にみられ、胎土には繊維質の混ざり物が含まれています。留意したいのは、この時期に、それまでにない玉製

品が出現する点です。遺跡からは、「^{けつじょうみみかざり}块状耳飾」と呼ばれる滑石製の垂飾具が2点出土しており、縄文時代では最古級（出現期）になります。垂飾は集団内の階層表現に関わる品とみられ、人類社会の発達史にとって極めて重要な資料になります。

かつて人類学者の鳥居龍蔵は、山岳地帯における先史考古学の重要性を説きました。縄文社会像を構築する上で、信州を始めとする山岳地帯の文化的動態の把握は欠くことができません。地域史編さんの金字塔とされる鳥居の『諏訪史第一巻』刊行から100周年を迎えます。中部山岳地帯の縄文文化を、ぜひご覧いただきたいと思います。

(町田勝則)



膳棚B遺跡の块状耳飾 (当館蔵)

古代・中世

鎌倉幕府の滅亡と建武の新政

現在、週刊少年雑誌にて連載されている北条時行を主人公とした漫画をご存じでしょうか。

時行は鎌倉幕府最後の得宗(北条氏惣領の家系)である北条高時の遺児で、新田義貞が鎌倉を攻めた際、諏訪頼重の手によって信濃に逃れました。

鎌倉幕府滅亡後、後醍醐天皇が始めたのが「建武の新政」ですが、北条氏の旧守護国ではたびたび反乱が起き、信濃に逃がれた北条時行も挙兵しました。そして、足利尊氏の弟である直義が占拠する鎌倉を攻め落とし、旧都を奪還したのです(中先代の乱)。一方、足利尊氏は時行の乱を鎮めますが、後醍醐天皇と対立したことで、一度は九州にまで落ちることとなります。

その後、^{こうごん}光厳天皇は後醍醐天皇方である新田義貞の追討を命じる院宣を尊氏に与え、義貞が討ち

破られたことで後醍醐天皇の建武政権が崩壊しました。光厳天皇の子である^{こうみょう}光明天皇は、日本の君主(北朝)となりましたが、吉野に逃れた後醍醐天皇を頂点とする南朝も開かれ、二人の天皇が立つ南北朝時代となったのです。そして、尊氏は光明天皇から征夷大將軍に補任され、新たな武家政権(室町幕府)を開きました。

今回の展示では、南北朝時代を舞台に書かれた「^{たいへい き えいご}太平記絵詞」などを中心に、時代の流れに信濃も関係していたことを紹介します。(柴田洋孝)



太平記絵詞 (当館蔵・複製)

江戸時代になると、農民の生産向上の努力や幕府・諸藩の新田開発奨励などで農業が発達しました。技術改良もすすみ、農具では備中鍬、千歯こき、千石通、唐箕などが用いられるようになって生産効率を高め、裕福な農民が現れました。

江戸時代も後期になると、農村・農作業の春から秋までの様子が農耕図として描かれ、屏風などに仕立てられるようになりました。

小テーマ「農耕図の世界」では、岩波其残の描いた「農耕図」を展示します。其残は文化12(1815)年に諏訪で生まれます。俳諧においては地元高島藩士の久保島若人の門下となり、のちに諏訪俳壇の中心的存在となっていくます。さらに日本画、俳画、楽焼、篆刻、生花、茶道、写真撮影などにも達者で、まさにマルチタレントでした。

農耕図には幕末から明治初年の安曇地方が描かれています。6隻2双となっていて、米作りの作業から収穫に至る12の場面が屏風に仕立てら

れています。当時の人々の姿や作業の様子が温かみのある軽妙な画風で表現されています。まるで現代のアニメや漫画にも通じる風合いです。とても可愛く、見ていると心がほっこりするような絵です。

其残のもう一つの「農耕図」は6月16日まで開催中の春季展で、12幅の掛軸として展示されています。こちらは初公開史料となります。ぜひ企画展と常設展にあります「農耕図」を比較してお楽しみいただけたらと思います。

(小林寿英)



岩波其残「農耕図屏風」(当館蔵)

常設展示室近現代コーナーで、生糸商標（シルクラベル）を展示しています。

江戸時代末期、日本はアメリカなど欧米各国と和親条約、修好通商条約を結び、日本の商人が横浜へ商品を持ち込むようになります。条約締結直後の万延元（1860）年の段階で輸出総額に占める蚕糸類（蚕種や生糸など）の割合は65%、慶応元（1865）年には88パーセントを占めるようになります。蚕糸類は茶と並んで輸出の大黒柱となりました。当時微粒子病（幼虫に斑点ができ結繭できなくなる）が流行していたヨーロッパ諸国が、病気に強い蚕種や生糸をアジアに求めていたことも追い風になりました。

しかし、輸出の花形となる一方、量や品質を偽った生糸が持ち込まれたり、斉一性に問題があったりしたことから、国内に器械製糸を行う工場の建設が求められました。明治政府は器械製糸

工場が各地で操業されることを期待して富岡製糸場を建設し、全国から集まった工女たちに器械製糸の技術を学ばせました。のちに『富岡日記』を著した松代出身の和田英もその一人です。

富岡で学んだ工女たちの努力もあって、全国に製糸場が作られるようになりました。それぞれの製糸場は、自分たちが生産した生糸に独自のデザインのシルクラベルを付けて海外へと出荷し、外貨獲得によって日本の経



生糸商標（当館蔵）

済を支えました。シルクラベルのデザインは、蚕や繭だけでなく、動物や名所旧跡など、多種多様です。それぞれの製糸場が、デザインに込めた思いを想像しながらご覧ください。（内城正登）



館蔵木製品 データベースの作成と更新

現在長野県立歴史館は31遺跡から出土した5.1万件に上る木製品を所蔵しています。これらはすべて長野県埋蔵文化財センターの発掘調査によって出土して文化財認定を受けたもので、後世に残す貴重な文化財（有形文化財の美術工芸品 考古資料）として、当館へ移管されたものです。縄文時代後期の水さらし場の部材から近世の漆器や曲物まで、時期幅は広く、器種も豊富です。

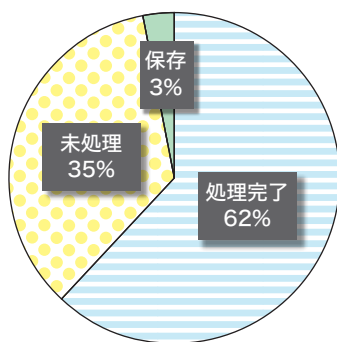
文化財とは「長い歴史の中で生まれ、はぐくまれ、今日まで守り伝えられてきた貴重な国民的財産（文化庁）」です。特に出土すること自体が非常に珍しい木製品が「守り伝えられてきた」環境とは、地下水が豊富にあることによってバクテリアが木製品を分解できない場合などに限られます。出土時は瑞々しく元のままのように見えますが、土中に埋もれている間にセルロースなどの主要な成分の多くが消失した状態に陥っており、水を取り込むことでかろうじて形が維持されているにすぎません。そこで、このような文化財とその情報を残していくためには、属性を登録した基本台帳を作成し、資料の状態を記録して全体像を適切に把握するとともに、同時並行で開館以来行ってきた保存処理を計画的に進めていく必要があります。

そこで平成21（2009）年度、国の緊急雇用事業として館蔵木製品のすべてを対象にしたデータベース作りを開始しました。木製品の収蔵場所は

外プレハブ・外プール・地下プール（保存処理前資料）、木器処理室（保存処理中資料）、第二遺物収蔵庫（保存処理完了資料）の5か所に分かれていました。そこで2名1組になって、資料を手に取り、ユポラベル（発掘調査時に資料1点1点に貼り付けられたラベル）から遺跡名、出土遺構、取り上げ番号、整理番号、樹種番号等を読み取ってパソコンに入力するとともに、資料と一緒に移管された「木製品整理カード」に書かれた情報やスケッチ図と照合し、現状を撮影してデジタル化し、同時に打ち出してファイル化していきました。ユポラベルに書かれている情報は遺跡ごとにまちまちで、木製品整理カードと照合できないものや文字が消えかかっているものもあり、さらに同一個体の破片が異なる場所に収蔵されているケースなど困難を極めました。それでも2013年3月までには主要遺跡出土資料のデータと保管場所の入力を終え、事業終了以降も残件の追加を継続し続けて完成させました。その結果、ようやくすべての資料をデータ上で管理できるようになったのです。

こうして完成した木製品データベースには、日常的に進行している保存処理の内容（脱色液を取り替えた日付、保存処理方法、PEG含浸処理のシリーズ名）や作業の進行に応じて推移する収蔵場所等が順次書き込まれていくため、常

に更新されています。平成5年度末時点で保存処理が未完了の木製品は17,500点あることが確認されていますので、すべての木製品の保存処理が完了する予定の令和21（2039）年度まで、継続していきます。（水沢教子）



※処理が完了した後、修復工程に入る



外プレハブでの確認作業

こう ぶん しょ かん 県立歴史館の公文書館機能

— 特定歴史公文書の移管から公開まで —

県立歴史館は博物館機能とともに、長野県の公文書や地域史料（古文書など）を収集・保存して利用に供する公文書館機能を併せ持っています。特に、令和4（2022）年から「長野県公文書等の管理に関する条例」（以下、「条例」）が施行され、公文書館としての役割がより重視されるようになりました。今回は歴史館の公文書館機能の一部として、特定歴史公文書の移管から公開までの流れを紹介します。

県の各行政機関が作成・取得した公文書を綴（つづ）った簿冊（ファイル）のうち、歴史的に重要と認められるものを「歴史公文書」と言います。保存年限が経過して現用を終えた歴史公文書のうち、特に知事が重要と認めたものが「特定歴史公文書」として歴史館に一括して移管され、永年保存されることとなります。移管は毎年9月に実施し、併せて虫菌害防止のための燻蒸処理を施しています。令和4年度は約1800冊、令和5年度は約2300冊が移管されました。歴史館ではまず、移管された特定歴史公文書を適切に保管し、利用に供していくための整理作業を行います。

作業の中心となるのが目録作成です。移管元の機関の序列や作成年度等を基準に、文書を配列した上で、①識別番号（公開時の請求番号）、②移管年度、③作成年度、④移管元の機関名、⑤簿冊の名称、⑥利用制限の区分（特定歴史公文書には個人情報等を含むことから利用制限がかかるものもあります）、⑦綴られた文書の概要といった、各簿冊の情報を入力して目録化を進めます。目録は特定歴史公文書を公開し、利用に供していく上で不可欠なものとなるため、一点一点の内容をしっかりと確認しながら作業を進めていきます。

特定歴史公文書には戦前や戦後間もない時期などの年代的に古いものも多く、汚れや破損・劣化がみられる簿冊もあります。簿冊の保存状態をこれ以上悪化させずに未来に伝えていくため、クリーニングをした上で補修を加えたり、酸化を防ぐために中性紙を用いた保存箱を作製して収納したりする作業を目録作成と並行して行います。ま

た、ホチキスやクリップ等の金属類は錆（さび）による文書の劣化につながるため、除去した上で文書をこより紐（ひも）で綴じ直すといった作業も行っています。

現在は5名の専門職員が整理にあたっていますが、「条例」では移管から1年以内の目録公開が定められており、丁寧さとともにある程度の



整理作業室の様子

スピード感を持ちながらの作業が求められます。

整理を終えた特定歴史公文書は当館の収蔵庫で永年保存され、申請があった場合は当館閲覧室などでの利用（閲覧）に供していくこととなります。簿冊の基本情報を記載した目録については、館ホームページや閲覧室においてExcelファイル及び紙媒体で公開しています。また、同じく館ホームページや閲覧室で公開している「収蔵史料検索」では、簿冊に綴られた文書の概要が登録されており、キーワード検索をすることもできます。利用の際はこれらを手がかりに目的とする特定歴史公文書を探すこととなります。

「条例」第一条で、公文書とは「県の諸活動及び歴史的事実の記録」であり、「健全な民主主義の根幹を支える県民共有の知的資源として、県民が主体的に利用し得るもの」とされています。公文書は歴史資料であるとともに



収蔵庫に収められた特定歴史公文書(2022年度移管分)

に、民主主義を支える県民の財産であり、誰でも利用する権利があります。多くの県民の皆さんにご活用頂けることを期待しています。なお、特定歴史公文書の利用方法等の詳細については館ホームページをご覧ください。（花岡康隆）

INFORMATION

インフォメーション

■2024(令和6)年 6月～9月の行事予定

6月

休館日
3・10
17・24

2024年 所蔵品展

学芸員のイチオシ 至宝の名品

近現代歴史資料編
～長野県民がみた幕末から現代～
～6月16日(日)まで開催中



講座・イベント

古文書講座

初級 A 第2回 6月23日(日)
B 第2回 6月20日(木)
中級 A 第2回 6月22日(土)
B 第2回 6月20日(木)
上級 第2回 6月15日(土)

考古学セミナー

6月1日(土) 13:00～15:30

県立歴史館講座

第2回 6月15日(土) 13:30～15:00
「岩波其残について」
講 師：小野和英氏(大町岳陽高校教諭)

7月

休館日
1・8
16・22
29

夏季企画展

しづう どう 疾風怒濤

木曾義仲

～文書と絵画でみる義仲の一生～
7月13日(土)～8月25日(日)

■開館30周年記念 寄席(要申込)
7月13日(土) 13:30～15:00
「源平盛衰記」
落語家：立川流真打 立川談慶師匠
※定員220名 1,000円(観覧料込)

■開館30周年記念 講演会(要申込)
7月27日(土) 13:30～15:00
「源頼朝と木曾義仲」
講師：長村祥知氏(富山大学講師)
※定員220名 500円(観覧料込)

■木曾義仲講座(要申込)
第1回 8月10日(土)
「木曾義仲武将伝伝！」
第2回 8月24日(土)
「義仲 北陸路をゆく
～義仲合戦はなし～」
村石正行(当館文献史料課長)
※定員220名 500円(観覧料込)

■パネルでたどる義仲旧跡行
(企画展示室横廊下)

■ミニ展示
「義仲のあと 市河文書と
鎌倉幕府」(第2展示室)

古文書講座

初級 A 第3回 7月28日(日)
B 第3回 7月18日(木)
中級 A 第3回 7月27日(土)
B 第3回 7月18日(木)
上級 第3回 7月20日(土)

県立歴史館講座

第3回 7月6日(土) 13:30～15:00
「県宝 屋代木簡出土30周年特別講座」
講 師：水澤敦子(当館総合情報課長)

古文書講座

ティーンズ 第1回 8月2日(金)
第2回 8月3日(土)
初級 A 第4回 8月18日(日)
B 第4回 8月22日(木)
中級 A 第4回 8月17日(土)
B 第4回 8月22日(木)
上級 第4回 8月24日(土)

※定員になり次第受付終了

ティーンズ考古学講座(定員15名)

1回目 8月8日(木)
2回目 8月9日(金)

イベント「歴史館で夏休み」
8月3日(土)

8月

休館日
5・19
26・27

9月

休館日
2・
9～19
24・30

秋季企画展

描かれた川中島合戦

～屏風・錦絵に描かれた戦の世界～

10月12日(土)～11月24日(日)

※9月9日(月)～9月19日(金)は
全館くん蒸のため休館となります。

古文書講座

上級 第5回 9月28日(土)

県立歴史館講座

第4回 9月28日(土) 13:30～15:00
講 師：「峠の祭記」櫻井秀雄(当館考古資料課長)

表紙写真の解説

紙本著色木曾義仲合戦図屏風

(江戸時代前期 右隻・部分
国立歴史民俗博物館蔵)

木曾義仲の挙兵から最期までの出来事の一つの画面に描き時間経過を表現した屏風。義仲の館の場面には、荒ぶる馬とともに子の義高や家臣らが群集の様子が描かれている。

行事アルバム

**** 歴史館でこどもの日 ****



5月5日(金・祝)は「歴史館でこどもの日」として、「土器moドキ」作りを開催しました。お気に入りの土器の形を選んで、自分の思い思いの色を付けて世界に一つだけの土器もどきを作りました。天気にも恵まれ、多くのお子さんご家族の皆様が来館してくださいました。

* 至宝の名品 近現代歴史資料編 *



2024年所蔵品展が6月16日で終了いたします。観覧された皆様から「黒船の情報がこんなに詳細に信濃国まで伝えられていたなんて知らなかったです。大変貴重なものを見せていただきました」、「SONYの前身の会社が企業疎開で須坂にあったなんて驚きでした」などの感想をいただきました。今年度の3月には2025年所蔵品展(原始)の開催を予定しています。ご期待ください。

長野県立歴史館たより 夏号 vol.119

2024(令和6)年5月31日発行
編集・発行 長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市大字屋代260-6
電話 026-274-2000(代) FAX 026-274-3996
E-mail: rekishikan@pref.nagano.lg.jp
ホームページ: <https://www.npmh.net/>

印刷 有限会社アツソーロ